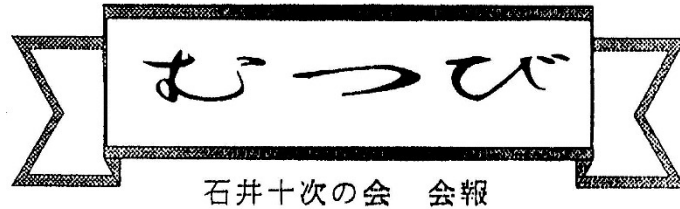


2022年
(令和4年)
10月12日



301号

石井十次・・・愛と無私と行動の人

椎葉村立不土野小学校
校長 大木場 俊弘

石井十次を知れば知るほど、この方は「愛と無私と行動の人」だったのではないかと感じます。十次の生き方からは、多くを学べますが、今回は、私が感じたこと、思ったことを5つに絞って書かせていただきます。

1 22歳の若者に「預かってほしい」と言うだろうか・・・信頼される雰囲気

十次が、まだ医学生だった22歳の頃、子連れの母親から頼まれて、1人の男の子を引き取ります。この出来事からも、十次が普通の若者ではないことが想像できます。一般的にいて、一学生に対して「うちの子を預かってほしい」と、頼むでしょうか？私が22歳の大学生であったら、預かる覚悟もないし、まず頼まれることもないでしょう。

「預かってほしい」と、母親が頼めるような雰囲気が、あったのだと思われます。人というのは、できそうもない人には頼み事をしないものです。「この人なら助けてくれる」というオーラのようなものが、22歳の十次にはすでにあっただのと考えています。

私は55歳になりましたが、今になっても、そんなオーラが身に付いていないと反省させられます。頼まれるような、信頼されるような人格をつくっていきたいです。

2 孤児救済のために医学の道を捨てる・・・判断の基準は損得にあらず

25歳の時、孤児の救済と教育のために、医学の道を捨てています。家族や支援者から期待されていた医者になることで、社会的地位や信用を得て、経済的にも豊かになれたことでしょう。

しかし、そういった世間の常識から見た「成功」や「豊かさ」とは真逆の道を選んでいきます。医学の道を捨てる決心をした十次は、それまでの6年間で学んできた大切な医学書を全て焼いて処分します。まわりの人から見たら、理解できない行動だったと思います。

この時の十次の判断を知った時に、私は論語にある次の言葉を思い出しました。

「君子は義に喩（さと）り 小人は利に喩（さと）る」（君子はそれが正しいか、正しくないかで物事を判断するが、小人は利益があるか、ないかで判断する。）

十次のこの医学への道を捨てたエピソードを知ると、損得ではなく、正しいか、人の役に立つかで判断し、行動しようという気持ちになります。

3 数年間でも大きな仕事はできる・・・「年だから…」と言わない

十次が孤児救済を始めたのが22歳、その6年後の28歳の時には、約300人の孤児を預かっています。この数年であっても、数百人の孤児の人生を変えたことになります。

そして、十次が亡くなったのは、48歳です。この亡くなるまでの26年間で、約3000人もの孤児を救済しています。

目の前に困っている孤児がいれば、救わずにはいられなかったということでしょう。地震や水害などがある度に、孤児救済の活動をしています。

この十次の生き方を知ると、自分は次の言い訳ができなくなります。

「もう年だから、大したことはできない。」

自分は現在55歳です。日本人男性の平均寿命が80歳を少し超えるくらいなので、その年齢まで生きるとすれば、あと30年弱あります。

十次からは、次のように言われそうです。「30年間あれば、いや、たとえ数年間であっても、世のため人のためになる行動は起こせるだろう。がんばれ。」

十次の生き方を知ると、「もう年だから」などと言わずに、自分にできる利他行をしようという気持ちになります。

4 「残った一人一人が石井となって・・・」・・・事業と人を残す

「財を残すは下、事業を残すは中、人を残すを上とす」という言葉があります。

十次は、孤児救済という事業を残し、その志は受け継がれ、今でも石井十次記念友愛社の活動として受け継がれています。素晴らしい事業を残したと思います。

そして、残したもので最も大きなのは「人」ではないでしょうか。

孤児を救済し、教育を施し、社会に羽ばたかせました。十次は亡くなる前に、集まった人たちにこう言い残したそうです。

「残った一人一人が石井となって、後を継いで働いてくれればそれで満足です。」

このような言葉を言えるのは、自分の思想や生き方が、しっかりと後に残る人たちに根付いていると感じていたからではないでしょうか。人材を育ててきたからこそ、言える言葉だと思います。

私もこの世を去るときに、「人を育てた」という手応えを感じたいと願っています。

5 十次が7歳の時のエピソード「縄の帯」・・・この母にして十次あり

十次の母である乃婦子さんは、とても優しい方だったそうです。近隣の貧しい家庭の子供達に対しても我が子のように面倒を見ていました。そんな母親に育てられた十次の小さい頃に、こんなエピソードがあります。

7歳の頃、天神様のお祭りの日、十次は、新しい着物に、母親が何日もかけて織った紬の帯を締めて出かけました。境内に行くと、古い浴衣の上に縄の帯を締めた同級生の松（まつ）ちゃんがいじめられています。「祭りの日に、そんな縄の帯締めてたら、天神様の罰が当たる」と、責められているのです。それを見ていた十次は、松ちゃんの縄の帯と自分の新しい帯を取り替えました。（この行動力も十次らしいなと思います。）

家に帰り、帯がない理由を母親に話しました。この時、きっと十次は申し訳ないという気持ちだったと思います。母親が何日もかけて織ってくれた帯ですから。

しかし、母親は、「お前、いいことをしたね」と褒めたのです。

このような母親に育てられたことも、その後「孤児をひきとり、育てる」という福祉の道に進んだ理由ではないかと思えます。

孝経には、親孝行に関して、次の言葉があります。

「身を立て道を行い、名を後世にあげ、もって父母をあらわすは、孝の終わりなり」

（立派な社会人になって、人の手本となり、「あんな立派な子どもを育てた親は素晴らしい。」と親が社会で誉められるようになるのが親孝行の最後の目標である。）

石井十次は、親孝行という点でも素晴らしい生き方をした方だと考えています。

私も、ささやかでよいから、自分にできる範囲で「身を立て」「道を行い」まわりの方に感謝されるような生き方を心がけたいです。

参考文献 「石井十次の歩いた道」 児嶋草次郎著 月刊誌「致知」令和4年9月号
「タンカタンカタンタン」 比江島 重孝 著 さえら書房
「石井のおとうさんありがとう」 和田登 著 総和社
「日本の児童福祉の父 石井 十次」 UMKテレビ宮崎

初代支部長の志「福祉の理念」を引き継ぐ

西諸支部 支部長 高山貫三

弊社、株式会社高山建設が石井十次の会 石井記念有隣園施設の工事を6年前に請け負って以来のご縁で、当時私は石井十次の会 都城支部に入会しました。高原町在住者としては、私と石原潤二郎氏2名の在籍で、石原氏は20年以上の会員歴との事でした。

その頃、高原町にも石井十次 神武の家の計画があり、石原氏から「高原町にも、石井十次の児童養護施設 石井記念神武の家ができるよ。」と教えていただきました。その後、3年前に西諸にも石井十次の会支援団体を作る会が出来ました。その時(今から2年前)、立ち上げたのが、小林市、えびの市、高原町の3市町合同の「石井十次の会 西諸支部」であります。

この会を立ち上げるにあたり大変ご尽力なされた、前支部長の石原潤二郎氏の予期せぬご逝去にあたり、茫然自失した所でした。

生前は「石井十次の会 西諸支部を立ち上げるんだ」と私の所に来られて、「今日は小林のどこどこに行きましょう」、次の日は、「えびののどこに行きましょう」と何度も地道に足を運ばれて、会員拡大にご尽力なされた結果、小林に10名、えびのに16名、高原に23名の会員で西諸支部が2年前に発足しました次第です。

コロナ禍の中、これも一重に家庭を預かる奥様の内助の功があればこそと、前支部長の石原潤二郎氏は「幸せな人だな」と会話した事もあります。今は亡き、前支部長石原潤二郎氏が強く願って設立された、「石井十次の会 西諸支部」は今後も、会員の皆様と邁進し、石井十次の会 西諸支部の永遠の繁栄を切に願って、これからも石原潤二郎氏の想いを引き継いでいく所存です。

追記 ※編集委員会からの情報

石原潤二郎氏(西諸初代支部長)は平成4年5月11日にご逝去されました。十次の会でもリーダーシップを発揮されました。

ご冥福をお祈りします。

《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介（敬称略）

【東京都】中田 奈緒子

【熊本県】社会福祉法人 豊心の里

ここまでの掲載者は編集委員会開催の都合により9月20日までのものとしています。

★お知らせ

今年も方舟館前の十次の庭には、たくさんの彼岸花が咲き、吹く風も秋の気配を感じるようになりました。

先日の台風14号で、銀杏の葉がずいぶんと落ちてしまったのが残念です。

★11月号の通信発送作業

11月10日（木）9時から

11日（金）9時から

コロナの感染状況により中止する場合があります

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

社会福祉法人 石井記念友愛社
後援会「石井十次の会」

☎ 884-0102

宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1

TEL/FAX 0983-32-4612

メール

yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

・編集委員会近況報告※その2

編集委員会は毎月末に方舟館にて開催します。むつび原稿4頁分の検討が主たる内容です。今回はその様子を紹介。

むつび原稿の計画

- ① 1～2ページ・・・会員で有識者等に依頼
- ② 3ページ・・・・・・役員及び編集委員等に依頼
- ③ 4ページ・・・・・・編集委員が担当(連続2か月)

※「会則の運用」から引用

原稿検討の時間帯は編集委員の実力とセンスが試されるときでもあり真剣勝負の雰囲気は漂うことも。

まずは、届けられた原稿を編集委員が分担してすべてを読み上げます。それぞれで黙読することはしません。また、執筆者が編集委員の場合は原稿の読み上げは別の編集委員が行います。

原稿検討のとき以下の3つを重視します。

- 1 執筆者の思いや願いを編集委員として最大限に尊重する。
- 2 執筆者の思いや願いを読み取ることは編集委員としての学びの場である。
- 3 最大の検討基準は、読者側に立つ読み取りをすること。

もちろん、文章の表記等で調整の必要は生じます。そのときには、執筆者に了解を得ることは当然のことです。下記写真は真剣な原稿検討の様子です。



9月の編集委員会

★編集後記

「むつび」巻頭は大木場俊弘氏から玉稿をいただきました。入会直後にもかかわらず十次への深い学びに感銘を受けました。

ありがとうございました。

※文責 竹之下 悟